IAWPRC 第1回アジア会議に参加して

○ Oral Session 参加者より

稲 森 悠 平*

国際会議に参加したことは数回あるが、発表するのは今回がはじめてであり、度胸で勝負だと思っていた。このような気持ちで Oral Session に参加したのは、わが国の研究者では私だけではなかったかと思う。しかし、なんとか切り抜けることができて安心した。やはり研究者として世界を舞台に活躍し一流をめざしていくためには語学が堪能であることが必須であることを痛感した。今回はアジア会議ではあったが、外国の研究者も多数参加しており非常に役に立った。

Oral Session は10月1日が Country reports, Case studies, Onsite treatment and fish pond, 10月2日が Planning and management, Rotating biological reactor and biological filter, Anaerobic process, 10月3日が Microbial pollution and water pollution, Aerobic process, Denitrification and biological phosphorus removal, Land disposal から構成されており、いずれの session においても一講演あたり 3～4つの質問、コメントがあり活発な討議がなされた。特に松井先生、真柄先生、岡田先生、中村先生等のわが国の研究者が流暢な英語で質疑応答されているのを見て感銘すると同時にファイトがわいてきた。

Oral Session の中で私は特に自然水域の水質汚濁、生物膜法、嫌気性処理、嫌気好気法における生物学的リン・窒素除去に関心をもって聞いていたが、韓国、台湾等においても生物膜法、嫌気性処理法が今後十分適用可能であることが感じられたことから我々の研究成果をこれらの国に積極的に活用していくことが必要ではないかと考えられた。とくに嫌気性濾床法などはインド、台湾、フィリピン等の温暖な地域であってこ

そその機能が最大限に発揮されることからぜひ活用することを検討してほしいと感じられた。

また、外国から参加された方は中国、韓国、ノルウェー、フィリピン、パングラデシュ、タイ、USA、シンガポール、西独、インド、ケニア、台湾、イラン、香港、エジプトなど多岐にわたったが、その研究内容も基礎的なものから実用的なものまで幅広く今後の研究を進める上で非常に役立った。実用的な研究ではインドの Er.Gya Sagar らの Low cost recycling & reuse of human waste on onsite disposal system およびケニアの I.Kyu らの Night soil for biogas : From Asia to Africa 等は今後の省資源、省エネルギー的な処理方法を開発する上での貴重な成果ではないかと思われた。

また、1990年には IAWPRC の国際会議がわが国で開催される予定になっているが、本会議に参加して感じたことは、すべての人が外国語での講演内容を理解できるとは限らないので費用の面で困難な問題があるとは思われるが、将来的には同時通訳体制を組みこむことにより参加された方が内容を十分理解できる体制をつくることが必須であろうと考えられた。

最後に今回の Oral Session では発表された方また質問された方のいずれもが満足のいく内容であったことについて本会議の参加者として非常にうれしく思った。今後、このような国際会議には積極的に参加して語学力をつけて外国の研究者との交流を図り、独創的な研究が行えるよう努力していきたい。本当に IAWPRC 第1回アジア会議に参加して Oral Session で話せたことは有意義であった。

○ポスターセッションに参加して

川 島 博 之**

ポスターセッションへの参加は日本を中心に米国、インド、台湾、西ドイツ、タイの6カ国25件に及び、中にはきれいなカラー写真を用いたものも多数あり、なかなか盛況でした。私にとってはポスターセッショ

* Yuhei Inamori, 国立公害研究所水質土壌環境部陸水環境研究室主任研究員

** Hiroyuki Kawashima, 東京大学生産技術研究所助手

ンへの参加は初めてであり、諸外国の研究者と親しく
 討論する機会に恵まれたことは、貴重な経験でありま
 した。特にタイ国の AIT, Chongrark 助教授は自身も
 酸化池の研究をしているとのことで、突っ込んだ議論
 を行うことができ有意義でした。通常の Oral Session
 ではどうしても形式ばった発表になり、質疑応答もお
 ざなりになりがちですが、これに比べればポスター
 セッションは、討論できる人数が少数に限定されると
 いう欠点は有するものの、優れた発表形態が感じられ
 ました。また、1つ意外の感があったことは、私の討
 論した相手が参加者総数が少ない割に外国人、特に欧
 州系の人々が多かったことです。これは彼らが熱心に
 議論に参加するためだと思われ、よく言われること
 ですが、欧米人の議論好きと日本人をも含めた東洋人の
 議論嫌い、または議論を面倒臭がる風習を、身近に体
 験することが出来ました。

もう1つ本セッションに参加してふと感じたこと
 は、肉声で、かつリラックスしたムードのなかで情報
 を交換することの重要性です。昨今は学会や討論会、
 また学術雑誌も多いため研究を発表したり、見聞きし
 たりする場には事欠きません。研究情報にしてもコン
 ピューターに登録された Chemical Abstract 等を利用
 して瞬時に取り出すことができます。しかし私など
 は、その情報のどれだけを真に自己のものとし十分に
 そしゃくしているか、おおいに反省するところです。
 数限りない情報のなかで、情報に取り残されまいと、
 うわべだけの理解で騒ぎまわっているような気がして
 なりません。しかしながら、肉声による生の議論はこ
 のような情報とは一味違ったところがあります。

昔、スピノザのもとを訪ねた若きライブニッツに対
 し、スピノザはそれまで誰にも見せたことのない彼の
 思想の集大成である「エチカ」を見せ、内容について
 約1カ月間も討論を続けたそうです。この訪問はその
 後のライブニッツの思想に大きな影響をあたえ、スピ
 ノザが異端者として非難されると、ライブニッツはスピ
 ノザよりの影響を隠すために、訪問自体をも隠した
 そうです。昔の哲学者の話と言ってしまうばそれまで
 ですが、情報の交換のありかたといったものについて

考えさせられるところが多い逸話です。深い思索をか
 さね、また、これほどまでに十分な時間をかけた討論
 により、後の自己の哲学が変わるような研究情報の交
 換というようなことは、現代には似合わないのかもしれ
 ませんが……。

活発なポスターセッション

最近、私の所属する大学の学内報の淡青評論という
 コラムに、ある先生が、学会や討論会が現代の科学技
 術を発展させる上で重要である事を十分認めた上で、
 昨今学会や討論会が多すぎることを、「そのうち学会の
 合間に研究する事態になる」と皮肉ったものがありま
 したが、情報化社会について言えて妙なところがあり
 ます。

近年は水質汚濁の分野も日進月歩で、多くの新しい
 情報をすばやく的確に捉える能力が重要視されます。
 このためには、多くの学会に参加し、ポスターセッシ
 ョンなどでも一瞥して、内容を把握する必要があります。
 社会の複雑化、科学技術の進歩のはやさ、科学の研究
 に携わる人の多さ、どれをとっても、多岐に渡る豊富
 な情報が社会の効率の維持に不可欠であることを示す
 ものと思われます。しかしながら、このような情報に
 は何かが欠けてはいないでしょうか。近代人、特に労
 働時間の長い我々日本人は、良かれ悪しかれ職業生活
 の中で人格を作って行かざるを得ませんが、その形成
 がこのような情報と情報の交換の仕方に頼らざるを得
 ないということは寂しい限りに思われます。

○外国人参加者より (JICA 環境技術コース研修員)

Tadeo G. Vitko Tobolska*

国際協力事業団 (JICA) による環境技術 (水質汚濁
 防止) 集団研修コースに出席するためペルー代表とし

* リマ上下水道公社化学担当官 (ペルー)

て日本を訪れている間に、IAWPRC と JSWPR が共催する「生活排水、し尿の処理処分と管理」に関する第1回アジア会議に、私はオブザーバーの一人として参加することができました。

集団研修コースと日程が重なるために、会議後の見学旅行に参加することができなかったことは、非常に残念でなりません。それにしても、私はこの会議が実によく組織されていることに心から感銘を受けました。日本的な気配りと友好的な雰囲気に満ちたこの会議は、私にとって忘れがたい経験となりました。

会議の内容については、私はこの分野の専門家ではありませんが、建設的な受け取り方をしていただけることを期待して、あえて私見を述べさせていただきます。

おそらく、この会議がこの分野での初めてのものであったために、この会議に参加して自国の問題点や知

見について討論するアジア各国からの発表者数が、必ずしも多くありませんでした。具体的な数字を記しますと、発表者の32%、日本を除いて計算すれば47%弱が、実際にアジア諸国を代表して来ている人たちでした。例えば、マレーシア、インドネシア、スリランカ、パキスタンなど、し尿の処理処分が満足に行われていないために深刻な伝染病の問題が起きている国々からは、代表が送られて来ていませんでした。

上記のような理由から、私は僥倖ながら、この次のこのような会議ではアジア諸国からもっと多くの人が参加して、し尿等の管理について各国の限界を率直に話し合えるようにし、適正技術を探求するための建設的な討論をまきおこして、ひいては日本の協力のもとにアジアの貧困な地域に平和と発展がもたらされるようになることを、心から望む次第です。

(国公章一訳)

○外国人参加者より (JICA 下水道コース研修員)

Alicia S. Chang Wong*

国際水質汚濁研究協会 (IAWPRC) と日本水質汚濁研究協会 (JSWPR) により組織された「生活排水、し尿の処理処分と管理」に関する第1回アジア会議が、1985年9月30日から10月4日まで東京で開かれました。

私は下水道集団研修コースのメンバーの一人として、国際協力事業団 (JICA) のはからいによりこの重要な催しに出席する機会を得ました。この会議にはアジア、アメリカ、アフリカ、およびヨーロッパの33カ国から190名以上が参加し、このうち110名 (58%) は日本からの代表者でした。この会議では各セッションで、最新の技術的・科学的進歩について発表と討論が行われました。優れた発表に興味を尽きず、活発な討論がしばしば行われたのですが、説明の時間が足りないこともありました。

ただ、この会議でとり上げられた技術は、研究者が本格的にそれに取り組めるような、施設、組織、および資源などの条件の整った先進国で、はじめて適用し得る技術だという感じを持ちました。

ペルーやその他多くのラテンアメリカ諸国のような開発途上国では、乏しい経済的資源を、まず第一に基本的な衛生のための施策や住民の衛生教育にさかなけ

ればなりません。そこには何らの衛生施設も持たないで生活している人達が、高い割合でいるのです。このような現実をかかえているために、私たちは存在する資源を最大限に活用し、私たち自身の状況にあわせて適正技術を開発し、応用研究を現実的なものとし、さらに利用可能な地域の人的資源を育成することが、どうしても必要となるのです。

それはともかく、私はこの会議に参加することにより、生活排水・し尿の処理処分と管理ということについて高度な最新技術を知ることができ、また同時にこの分野の専門家や著名な科学者とも知り合うことができました。終わりに、私はそれぞれの国が自国の政治的、社会的、文化的、経済的、および財政的な現状にあわせて、最も適切な技術を選ぶようにすべきであることを申し述べたいと思います。

IAWPRC、JSWPR、および JICA に対し、この会議に参加させていただいたことを心から感謝申し上げるとともに、日本人の進んだ考え方を帰国後に生かすことにより、貢献したいと私が願っていることを最後に付記します。

(国公章一訳)

* 国家上下水道公社上下水道維持管理技師 (ペルー)